
悪魔への意志

メサント・モリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔への意志

【Nコード】

N0476K

【作者名】

メサント・モリ

【あらすじ】

人の心の中にある恐怖。もしそれを制し、操ることの出来る人間がいたとしたら？

怪物のようなカリスマと、悪魔のような才能を持つ一人青年を巡り、それはやがてスペイン全土を巻き込む大事件となる。

芸術家ラファエロ

この物語の主人公は誰なのだろうか？ 悪魔、天使、権力者、芸術家、それとも普通の人間なのか。これがサバイバルなら、生き残るには主人公になるしかない。ある者は神に選ばれる事を望み、ある者は神を制する事を意図する。途方もなく狭い世界の一角で、囁かれる名前はただ一人。

スペイン、バルセロナ。高層ビルやホテルの立ち並ぶ都心から少し離れると、歴史ある家屋や教会などがある旧市街に出る。大通りから一本、二本と裏道に入っていくと住宅街が並び、その一角に古く小さなアトリエが建っていた。とたん屋根は所々へこみ、紅色に塗られた外壁は色あせて、部分的にその色彩を留めているだけであった。

めったに人の出入りが無いこの家から人の話し声がした。壁が薄い分、小さな声で話しても外に筒抜けだった。ただ、この周りは人通りが極端に少なく、会話の内容が外にまで漏れたところで聞く者は誰もいなかった。

「相変わらずの生活だな」

低く重たい声が部屋の中を伝わった。

「珍しいものだ。お宅がここに来るなんて」

このアトリエの主、名前をラファエロと言う。暗めの茶色い髪の毛は肩まで伸び、顎から頬まで髭で真っ黒だった。着ている紫色の半袖Tシャツは、様々な色が塗りつけられており、元の姿を留めてはいない。部屋の中には描きかけの絵が至る所に乱雑に、無造作に置いてある。

「どうせ君は来いと言っても来ないだろう。世捨て人に腰を上げさせるのは容易でないよ」

低い声の持ち主は随分と高齢な人物だった。部屋の電気は付いておらず、部屋に一か所しかない窓から唯一の光が入ってくる。老人はその光をよけるようにして、近くに置いてあった椅子に手を伸した。

「世捨て人……か。まあ今はそれほどでもないさ」

ラファエロはキャンバスに向かい合ったまま、老人の相手をしている。左手に鉛筆を持ち、デッサンを描き上げるほうに集中しているようだ。

「それを聞いて安心したよ。『バルセロナの壊し屋』はようやく隠遁生活を抜け出す気になったらしい」

「隠遁生活ね、まあ入った覚えも無いんだけど」

老人はスーツの胸ポケットから一枚の写真を取り出すと、ラファエロのほうへ手渡した。右手でそれを受け取りその写真に軽く目をやると、ゆっくりと彼の鉛筆が制止した。その写真にはサングラスをかけた一人の青年が写っている。

「これをどこで？」

表情は先ほどまでと同様に落ち着いている。だが、声のトーンが明らかに上がっていた。

「それは重要じゃないよ。それより、君は彼の事をどの程度知っているんだね？」

「まず、私の番だよ。この写真はどやって？」

老人は椅子から立ち上がると、胸ポケットからも一枚の写真を出し、ラファエロに渡した。

「サラマンカ大学か。ここで彼を撮ったと」

「そういう事だ。最も、彼がこの大学に通っているのかまでは知らないが」

サラマンカ大学はスペイン最古の大学で、学問の水準も最高峰にある。歴史、芸術の分野が特に盛んで、数多くの偉人を輩出している。

「それで、誰がこいつを？」

雲が太陽を覆い、窓から差し込む日差しが少し弱まった。部屋はさらに暗がりになり、お互いの顔がやっと見えるくらいだった。

「まあまあ、それはこちらの内緒にさせてくれ給えよ。ところで、君は人にとつての最大の恐怖は何だと思う？」

ラファエロは鉛筆をキャンバスに置き、立ち上がった。そして窓のほうまで歩くと、カーテンを閉めた。辺りを闇と静寂が支配した。まるで小さな宇宙に閉じ込められたように、閉塞感が部屋一帯を漂よった。

「これかい？　闇と静寂。人が根源的に恐怖するもの」
静寂を破ったその一言に老人は頷く。

「人は“無”にこそ本当の恐怖を覚えるものだ。自分自身の存在を見失ってしまうその怖さに。闇から逃れるために人は火を灯し、静寂を免れるために集団で生活する事を選択する。それに比べれば、その他の恐怖などは取るに足りん」

ラファエロは先ほど渡された青年の写真に目をやった。カーテンの隙間から、こぼれるように入ってくる僅かな光が写真を照らしている。

「だがもし暗闇にも静寂にも耐性を持ち、恐怖を操る事の出来る人間がいたとしたら、君はその者をどう思う？」

「怪物かな、もしくは悪魔か。どっちにせよヤバイ奴だろ」

恐怖は人を飲み込む。思考が中断させられ、意のままに躍らせられてしまう。

「恐怖を超越した人間。悪魔に魂を売り渡したのか、あるいは人間の魂を持った悪魔なのか。いずれにせよ、そのうち私の目の前に現れる事になる」

「その前に彼の事を知っておきたいと」

老人は椅子を元の位置に戻すと、玄関のほうへ歩いて行った。

「日を改める事にするよ。遅かれ早かれ分かる事だ。それが次来た時になる事を望むよ」

ドアを開けると、一瞬にして部屋の中が明るくなった。老人は思

わず手で日差しをさえぎった。

「怪物に手綱を掛けるつもりで？」

そう言くとラファエロは玄関まで行き、老人を見送った。

「どちらかだよ。手懐けるか、殺すか……。ああそれと、気分が変わって話そうと思っただらここに電話してくれ」

黒色のスーツから白色の名刺を取り出すと、ラファエロに手渡す。

「名刺ならずと以前にも貰っているはずじゃ？」

「それは新しい物だよ。こういう立場だといちいち作り変えなくてはいけなくてね」

老人が出て行くと、ドアは閉まり、再び部屋の中に暗闇が戻った。ラファエロは青年の写真を手にし、隣にいても聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「サラマンカか……」

芸術家ラファエロ（後書き）

前回書いていた『悪魔と天使』をリニューアルしました。ストーリー自体は同じですが、次回の話辺りから内容が少し変化するのです。

暗き扉より（前書き）

暗き扉より

芸術家ラファエロ・デルバルド。角張った頬骨に、だらしなく伸びた髪。薄く紫色の唇に、黒く染まった彫の深い目をしたこの男は、かつて芸術家としてその名をスペイン中に知られていた。彼の描く絵は従来の画法や概念を一切否定したもので、荒々しい色使い、遠近法の完全なる無視。そして最も印象的なのは、描いている対象物に彼独特の感覚を吹き込み、全く異なった物に変えてしまう事である。例えば、ある時彼がマドリッド中心街に立ち並ぶ高層ビルを描いた時、それは八岐大蛇のような無数の頭を持つ怪物として表現された。

彼に陶醉し、その絵を深く分析する者達は彼にあるあだ名を付けた。『壊し屋』。彼の絵は全てを破壊していく、これまでの絵画の歴史、概念、それに目の前にある風景まで。その名前を象徴するように、ある時彼が世界最大の美術展覧会の一つである、ヴェネツィア・ビエンナーレでの受賞のスピーチでこう語った。

「芸術とは何か？ それは破壊と再生の営みであります。それも物凄い速さで行われていくものなのです。人間の細胞は三日で全てが破壊され、それと同時に新しいものへと変わって行く。芸術もそうでなければいけません」

そして、次に放った言葉がイタリア中、いや世界中に衝撃を与えた。

「バプロ・ピカソ、エドゥアール・マネ、ジャクソン・ポロックらの偉大と呼ばれた芸術家達。私にとっての彼らの絵は、ガラクタ同然のように映るのです」

世界最大の芸術の祭典の場において、彼は崇高なる先達を否定したのだ。それはまるで教会の祭壇に立ち、波いる信者たちの前で神とイエス・キリストを一度に冒瀆したようなものだった。

多くの人々が彼を痛烈に批判する様になり、その一方でより多く

の人々がその姿に強烈なカリスマ性を感じ、今まで以上に彼に心酔するようになった。それから彼の絵は更なる評価を受けるようになり、一枚の絵に何千万という値が付く様になっていく。彼を批判していた人々も、次第に彼を認めざるを得なくなり、気が付けばヨーロッパを代表する画家にまで昇り詰めていた。

まさに芸術家として、ラファエロという男は人生の絶頂期を迎えつつあった。しかしその輝ける絶頂期の中で、彼は芸術の世界から静かに身を引いた。突如として絵を描かなくなり、またしても人々を驚かせることになる。

——それから、七年。人々は彼の事をほとんど忘れていた。記録にはある。だが『壊し屋』とは過去の人物で、それは既に歴史であり、生きているラファエロ・デルバルドに対するものでは無かった。

失われた七年。そう言えるかもしれない。そして今、一度死した男は再び日の当たる世界に身を出そうとしている。片手には一枚の青年の写真を。そしてもう一方の手は眩しく輝く、午前十時の太陽を遮って。

「やっと来たか。随分と待たされたものだな」

鯨は息をするために、その巨体をしばしば海面に見せる。早くて二、三分で、長ければ三十分以上その間隔は開くらしい。だらしく伸びきった髪と鬚は、しばらく振りに通った近所の理髪店で綺麗に切り揃えられていた。

サラマンカ大学

——カステイリヤ・イ・レオン州サラマンカ。首都マドリードから北東に約二百キロに位置する都市で、旧市街には歴史的な建築物が数多く残っている。赤茶けた建物が並ぶ街並みは夕日を浴びると鮮やかに輝き、緩やかな炎のように暖かみを持つ。

旧市街の中心から西へ歩くと、繊細なレリーフが施された巨大な石造りの門が出迎え、その向こうには多くの建物がたたずんでいる。サラマンカ大学。

十三世紀前半に設立されたこの大学はヨーロッパでも最古の大学の一つと言われ、『ドン・キホーテ』を描いたセルバンテスや、新大陸に到達したコロンブスなど、多くの著名人が学んだ。「知識を欲する者はサラマンカへ行け」とまで言われ、事実サラマンカの人口の三分の一が学生である。

「何十年振りだか。相変わらず豪勢な建物だ」

ラファエロは正門の前で立ち止まると、少し後ずさりして、門全体を見渡した。今から二十年ほど前、彼はこの大学を卒業している。以来、訪れるのは初めてである。

ひとしきり思い出に浸ると、人の流れに身をまかせ大学の中へ入る。門をくぐると、四方を巨大な建物が囲み、その中心には聖職者の銅像が立っていた。石畳の地面を歩く音が周りの建物に木霊して、無数の音の塊となり消えてはまた起こる。

「とりあえずは手当たり次第に聞いてみるか」

この広い大学内を悪戯に歩きまわった所で時間の浪費にしかならない。ラファエロはとりあえず、例の写真を元に聞き込みする事にした。

「ちょっと、君。少しいいかい？」

目の前を通り過ぎようとした少し背の低い青年の肩を叩き、こちらのほうを振り向かせた。彼は茶色の髪を翻してラファエロの顔を

見た。

衝撃だった。

信じられないほどの美しい青年なのだ。小麦色の肌は眩いばかりで、形良く整った鼻筋に口元。そして何よりも、青色の瞳はまるでサファイアのような輝きを放っている。

天使だ。ラファエロは思わず口に出してしまいそうだった。その容姿はもはや芸術の域ですらある。一人の芸術家として、感動を覚えずにはいられなかった。

「あつ……そうだ。この写真の男の子なんだが、誰か分かるかな？」
危うく呼び止めた趣旨を忘れそうになっていた。

「分かりましたよ。ちよつといいですか」

彼は前髪を少し掻きわけ、写真に目をやった。真剣に思い出してくれているようだった。見る角度を変えては何度も確認している。

「どうだ、分かるか？」

「いや、思い出してみようとしたんですが。サングラスをしていると顔が良く見えませんね」

彼は申し訳なさそうな顔をしていた。突然足止めしたにも関わらず随分親切に対応してくれる。

「確かにこのサングラスが邪魔だな。でも君じつと見つめていたから、何か感じたことあったんじゃないか。ほんの些細な事でもいいから、とりあえず教えてくれないか？」

「髪が黒いからアジア系の人かと思ったんです。でもそれにしても肌の色が白いので、アジア人以外で黒髪の人を思い浮かべていたんです。ですが僕の知り合いで、思い当たる人は特にいませんね。大学は広いですから、他の人に当たってみれば分かると思いますよ」

「そうか、分かったよ。ありがとう」

そう言つてその場を離れようとした時。

「良ければご一緒しましょうか？ 学生が一人付いていたほうが何かと便利でしょう」

ラゼルは優しく微笑んでいた。濁りの感じさせないその瞳は、今

にも吸い込まれてしまいそうだ。

「助かるな、是非頼むよ」

「じゃあちよつと図書館のほうまで一緒に一緒してもらって良いですか？ 人と待ち合わせしているんですよ」

ラゼルの言うままに二人は図書館へと足を伸ばした。ラファエロにとって懐かしい風景が通り過ぎて行く。学棟の周りを囲むようにして木々が立ち並び、芝生の中を真砂で敷き詰められた道が突き抜ける。所々に植えられた樹木の下には影ができ、それを背もたれに読書をする学生達が目に入ってくる。かつてあそこに居たのは自分だと思つと、何とも言えない気持ちになるのだろつ。

「あそこです」

図書館の入り口には沢山の学生がいた。中へと入って行く者、出て行く者、その場でたむろする者。その中で、入り口から少し離れた位置に一人待つ女の子の姿があった。ラゼルは彼女に近づいていくと、どうやら向こうも気付いたみたいだ。こちらに向かって手を振って近づいて来る。

「紹介します。僕のガールフレンドのイルーネです」

彼女のほうにもラファエロの事を説明する。

「初めまして、ラファエロ・デルバルドだ。ラファエロでいいからラゼルと同じく青色の瞳をしている。ただこの子の青色のほうの色合いが薄く、より透明感のあるものだった。太陽の光を受けて眩しく輝くブロンドの髪は背中まで伸び、大きく丸い形をした目と、口元の笑窪が可愛い。」

まあ一般的に言う美男美女のカップルと言った所か。

「もしかして……」

いつの間にか、イルーネの視線が釘付けになっていた。

「ん？ 私の顔に何かついてるかい？」

彼女は首を横に振る。隣で見ていたラゼルも彼女の行動を不思議そうに見ていた。

「違つてたら、ごめんなさい」

「言ってみて」

「画家のラファエロさんですよ。『壊し屋』って呼ばれてた」
ラファエロは驚いた。まさかこんな若い子が自分の事を知っているなんて。何せラファエロが世間に出ていた頃は、彼女はまだ十三歳、十四歳といったところだろう。

「嬉しいな。知ってくれてるなんて」

彼女は照れくさそうに笑っていた。そしてラゼルのほづをちらりと見る。

「本当はラルがファンなんです。それで私も影響されて」

ラゼルはズボンのポケットから携帯電話を取り出すと、待ち受け画面を開いてラファエロのほづに差し出した。

「もう何年もこの絵なんです」

「懐かしいな」

そこには人の顔が描いてあった。それはラファエロが芸術の世界から姿を消す直前に描いた絵だった。ラファエロにしては珍しく、対象物を写すようにそのまま描いている。

「ああ、そうだ。ちよつとイルーネに聞きたい事があるんだけど今いい？」

ラゼルが写真の事をイルーネに説明してくれて、彼女は快くその申し出を受け入れた。

写真を手に取り先ほどのラゼル同様、見る角度を幾度となく変えてみては確かめてくれる。

だが、

「うーん、分かんないな。ごめんなさい」

「そうか……」

ラゼルの彼女なら交友関係に関しては、彼と被る部分が少なくないただろう。そうなると彼女も写真の青年について知っている可能性は低いと思える。残念ながら、結果はラファエロの予想通りだった。

「こう聞いて行くだけだな。何か良い方法はないものかな」

時間が無い訳ではないが、このペースだとざっと一年はかかってしまいそうだ。ラファエロは早くも、聞き込み調査に限界を感じていた。

「それなら教務塔の事務室に行ってみませんか？ あそこならコンピュータにアクセスして、全学生のデータを調べられますよ」

「ああ、あそこか」

ラファエロの学生時代にはまだコンピュータは無かったが。

「確かにそれだと聞き回るよりずっと早いな」

「決まりですね、こっちはです。イルーネも来るだろ？」

「どうやら彼女も、この青年探しに興味を持ち始めたようだ。直ぐに首を縦に振ると、随分と乗り気で先頭を歩き出した。」

青年ラゼル

もう九時を回っている事だろう。一日の殆どを空の上で過ごす夏の太陽も、少しずつ傾き始め、外は次第に涼しさを取り戻していた。しかし、ラファエロ達のいる事務室は違った。一台のコンピュータと壁沿いに囲むようにして置いてある学生の個人資料の棚があるだけで極端に狭く、窓は子猫がやっと通れる程度のもので一つしか付いていない。日中の間に溜まった熱気はほとんど抜けず、ラファエロ達は全身汗だくになっていた。

おかげで作業はほとんど捗らなかった。つい先ほど、そろそろここを閉める時間なので作業を終えて欲しいと言われた所だ。ラファエロとラゼルは棚から出した大量の資料を片づけている。イルーネは気を遣ってか、涼しい外に出たかったからか、自販機まで行って冷たい飲み物を買に行っている。

「あの今さらなんですけど聞いてもいいですか？」

ラゼルは額から滴り落ちる汗を払いながら、久し振りに言葉を発した。

「何だ？ この写真の青年の事か？」

「いえ、さっきの職員室の前での事です。あの時にラファエロさん、職員の方に何か見せていましたよね。そしたら職員の態度が急に変わりました。一体何を見せたんですか？」

実はこの事務室に入る際、ラファエロは職員に入室を止められていたのだ。いかにこの大学の卒業生とはいえ、外部の者に学生の個人ファイルを閲覧させる訳にはいかないと。

「ああ、あれか。あの時はこれを見せたんだよ」

Tシャツの胸ポケットから、一枚の名刺を取り出した。汗でべとべとになっている。そこには「オロ・イスパニア・グループ 最高取締役 ヘレネーロ・ゾラン」とあった。

「ええっ！ こんな凄い人と知り合いなんですか？」

ラゼルはひどく驚いていた。

「そんなに驚きか？」

「だってオロ・イスパニアって言ったら、この国のトップ企業じゃないですか。いつ知り合ったんんです？」

まだ興奮さめ止まぬようだ。若干、声のトーンがおかしい。

「いつだったかな。とりあえず私がまだ画家として有名だった頃だから、七年以上は前だろうけど……」

ラファエロは職員に止められた時、ふとイスパニア・グループがこの大学に多額の寄付金をしているのを思い出したのだ。そこで先日渡され、たまたまこのポケットに入っていたあの名刺を見せた、という訳だ。

「お待たせ、飲み物買つて来たよ」

イルーネが自販機から戻って来た。両方の手にはペットボトルが一つずつ握られており、彼女自身は汗を綺麗に拭き切っていて気持ちよさそうにしている。道理で帰って来るのが遅い訳だ。

二人は一旦、手を止めて彼女からペットボトルを貰い水分補給をすると、今度は三人で資料の片づけに入る。片づけている間中、ラゼルはイルーネに先ほどの話を興奮しながら語っていた。作業は太陽が沈んで辺りが暗くなるまで続いた――。

「やっと終わりましたね」

ラゼルは最後の資料を棚に戻すと、大きくため息を付く。閉館時間ぎりぎりだった。三人はほとんどの電気が消されていて真っ暗な廊下を早足で通り過ぎ、教務塔を後にする。外に出ると、電灯の光で幾らか明るかった。学内にはまだ多少の学生が残っており、いささかの活気がある。

「ラファエロさん、ちょっとお願いがあるんですけどいいですか？」

「どうした？」

「今日中に図書館に行って済ませなきゃいけない用事があるんです。だから帰り道、イルーネを送って行ってもらえませんか？ 夜道で

すし一人で行かせるのが心配なんで」

ラファエロが承諾したのを見届けてから、ラゼルは暗闇の中へと消えて行った。

「なんかごめんなさい。ラルって心配性なんです」

イルーネは少し申し訳なさそうな顔をしている。

「いや、夜道は何かと危ないからな。男なら誰でも彼女の帰り道は心配するさ」

ラファエロにとってこのくらいの年の女の子と、二人きりになるのはかなり久し振りの事だった。そうで無くとも、この七年間はほとんど人と接していないのだから。

「ところで彼は図書館に何の用事だったんだ？」

「多分、図書館の清掃を手伝っているんだと思います。半年くらい前から図書館の司書の人達と仲良くなつて、定期的に手伝いに行ってるんです」

また随分とお人好しと言うか、おせっかいと言うか。ラファエロの青年探しを快く手伝ってくれたのも頷ける。

ラファエロは歩きながら会話が途切れないようにした。こう言う時は話し続けるのが一番良い。

「優しい彼だな。ところでさ、聞いたかったんだけど二人はいつぐらいから付き合ってるんだい？ 良かったら教えてくれよ」

「もう二年になりますね、大学一年の、まだ入学して一カ月が経つか経たないかくらいの時です。ラルからいきなり告白されて」

暗くてよく見えなかったが、恐らく顔を赤らめているであろうイルーネが想像できる。話すテンポが僅かに遅い。

「それって初対面？」

「そうです。でも私もラルの事は知ってましたよ。だって入学して直ぐに、女の子の間で凄い評判だったから」

美男子はこれだから良い。

「それで、返事は？」

「やっぱり最初は迷いました。だって知っているとは言っても、一

度だってちゃんと話した事ない相手ですから。でもその日ラルと色々と話して、ラルがどんな人で、なんで私に告白したかって事が良く分かったんです。何よりとっても優しくかったし、私の話に凄い夢中になってくれたのが嬉しくて」

「彼は君のどんな所を好きになったかって、聞いても教えてくれないよね？」

イルーネは笑いながら頭を横に揺らした。さすがにそこは二人だけの秘密にしたい所だろう。

「でも周りから羨ましがられるだろ？ あれだけかつこ良くて優しい彼だと」

「そうですね。友達と話している時も、ラルの事聞かれたりしますね。ただ……」

少し、イルーネの声のトーンが下がった。

「ただ何？」

少し間が開く。どうやって言おうか、言葉を選んでいる様子だった。

「ラルって誰にも見せない一面があるんです。ずっと一緒にいるとたまに出るんです。何って言うかな、もう一人のラルって言うか」

何処か的を得ていないな、ラファエロは自然とそう感じた。

「自からの深淵を見ているラゼルって事？」

「あつ、そう。そうです、そんな感じ」

ラファエロは何か、ラゼルに自分と通じるものを見た気がした。

あの七年間、いやそれ以前から彼が悩み、感じていたもの。

「彼だけじゃないと思うよ。人は誰だって自分にしか見せない一面はあるさ」

イルーネは黙っていた。ラファエロにはそれが頷いたのか、否定したのかは分からなかったが、それがどちらかの反応を示していたように思えた。

日中赤茶けて見えたサランカの街並みは、オレンジ色にぼやける数え切れないほどの光と混ざり合い、一つ一つが自ら輝きを放つ恒

星の様に見えた。ずっと高い、空よりも高い場所からこの地を見下ろせば、それは我々が見上げる銀河のような景色になっているに違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0476k/>

悪魔への意志

2010年10月12日05時55分発行